

Book Review

健康寿命の延伸をめざした 口腔機能への気づきと支援 ライフステージごとの機能を守り育てる

向井美恵・井上美津子・安井利一・眞木吉信・深井穂博・植田耕一郎 編著
公益財団法人ライオン歯科衛生研究所 編



Reviewer

戸原 玄 Haruka Tohara

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科老化制御学系
口腔老化制御学講座高齢者歯科学分野)

B5 判, 216 頁
定価 (本体 3,800 円+税)
医歯薬出版刊



少子高齢化が進展するわが国では、高齢者に対する歯科医療のあり方が問われるようになり、この 10 年でアプローチは大きく変わってきた。つまり、歯牙に対する形態的アプローチだけでなく、口腔の機能に対するアプローチが重要視されているのである。

高齢の患者が要介護になるなどの理由で歯科医院への通院が困難になったケースは、今の日本には膨大な数にのぼることは間違いない。そのような患者に対しては従来のように外来において診療を施すだけでなく、機能回復を目指したりハビリテーションを行うこと、歯科医療スタッフが患者を訪問すること、さらには多職種と連携を取って診療することが注目される時代となった。社会情勢の変化に対応してゆくために、このような形で超高齢社会への対応を今後も充実させていく必要はある。そしてそのためには、「視点」をどのようにもつかということが重要で、「視点」をもつことによって、さまざまな答えは自ずとみえてくる。

本書『健康寿命の延伸をめざした口腔機能への気づきと支援』には、妊

産婦に対する指導から乳幼児の発育、学齢期や思春期に起こるさまざまな問題、さらには生活習慣病から介護・看取りまで、それこそ生まれる前から亡くなるまで、われわれが口腔を通じて、国民に対してどのような関わりができるのかが幅広く紹介されている。上述のように、高齢者に対する問題が取り上げられやすい時代ではあるが、従来行ってきた診療をどのように患者に提供するか、つまり幼児や学童へは口を通じて「育むこと」、高齢期から終末期を迎えるに当たっては「支えること」といった視点をもつだけで提供する医療の目的をよりはっきりさせることができる。口腔を診療するために口腔のみをみるのではなく、また現在の状態だけをみるのではなく、さまざまなライフステージにある患者のこれからを見据えて、何が必要であるのかを考えることが大切であり、本書にはその方向付けのためのヒントが数多くちりばめられている。

本書を手にするにあたっては、まず総論を一度通してお読みいただいて、それぞれのライフステージにおいては

どのような関わりが重要であるのかを把握し、そのうえで読者の方々が日常診療することが多いステージにある患者への対応を各論でお読みいただくとよいであろう。もちろん、日常接することが少ない患者への対応も勉強になるのでお読みいただきたい。たとえば、思春期のやせの問題は高齢者を専門にしている方にとっては初めて知るような内容かもしれないし、胃瘻や認知症のことは一般外来で診療している方にはなじみがない話題であるかもしれない。

また、医療関係のみならず学校関係者や介護関係者などにお読みいただいてもよいし、保健所や行政機関で口腔関連の保健衛生を考える方にとっては今後の歯科検診のあり方の概念などはとても参考になると思う。

個々の疾患や病態への対応についての書籍は他にもあるが、具体例という意味だけではなく、われわれの介入目的や今後のあり方、つまり考え方を明示している点で、本書はすべての歯科医療関係者に対して必携の一冊であると思う。